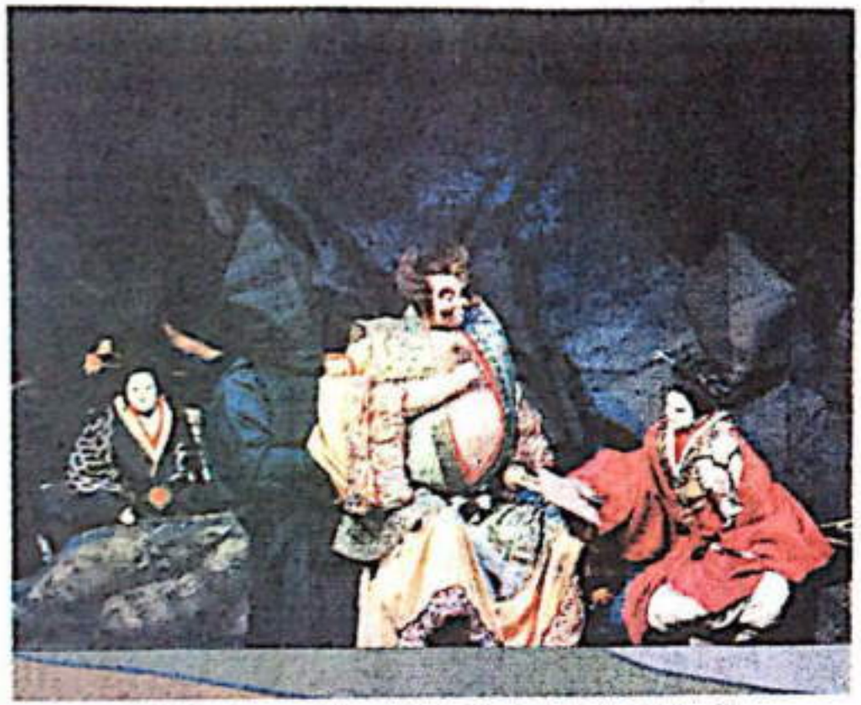
■ 国立劇場「不破留寿之太夫」ほか

三味線が織り込む多彩な音色

住大夫、さらには源大夫も引退してさびしくなった文楽だが、新作を出して活気を生んだのは頼もしい。その「不破留寿之太夫」は第3部に。1時間20分の舞台はシェークスピア劇の人気者フォルスタッフが題材だ。三味線の清治が監修し、作曲した。

大酒飲みで女たらし、口八丁の老騎士は小心者だが、権力の論理には従わない。人形劇のデフォルメされた身ぶりでキャラクターの魅力が生き生き。太鼓腹が動くだけでもう喜劇の時間だ。つかう勘十郎の苦心のたまもの、オリジナル人形が実にいい。桜の大樹（石井みつる美術）が照明効果で立体感を生む。多彩な音色を織り込む三味線の合奏もにぎやかだ。



太鼓腹の人形がお目見えした

舞台劇としては物足りなさも。セリフ劇でもオペラでも太っちょが美女にやりこめられる場面は見せ場だから工夫がほしい。黒マントの謎めいた男は原作者の分身らしいが、いささか唐突。新作には時間をかけた演出も必要か。

が、これはやはり現代劇としての文楽の可能性を感じさせる舞台だろう。七五調に現代語の感覚を加味した台本（河合祥一郎）は斬新な間を生み、モダンな味を英大夫が生かす。ファルス（笑劇）の怪人が権力者を笑いのめすラストの独白は、文楽の文法も原作の意図をも超えた反戦のメッセージとなった。

一方、古典も第一部「双蝶々曲輪日記」で難しい橋本の段を嶋大夫・錦糸で聴かせ、八幡里引窓の段の咲大夫・燕三が気迫十分。激しい葛藤を超え犯人の濡髪に投げられる手裏剣。咲大夫の「濡髪捕った」の切っ先が鋭い。

第二部は千歳大夫、文字久大夫が盛綱陣屋の段を語る「近江源氏先陣館」に「日高川入相花王」。22日まで、国立劇場小劇場。

（編集委員　内田洋一）